

『極道彼氏の初恋～玩具で開発されて～』

著：高月紅葉

ill：逆月酒乱

痩せているくせに、見た目以上に力のある男から関節技を決められ、引きずり込まれたのはバイパス沿いにあるラブホテルだった。

部屋に入る直前にも暴れたが、抵抗しきれなかった。背中へとひねり上げられた手の指にボールペンを挟まれ、力をかけて骨を折るくらい簡単にできると脅されたからだ。負傷すれば鹿児島へ駆けつけても役に立たないと耳打ちされ、シゲは男に従った。怪我をするのも嫌だが、いちおうカタギだろう相手との警察沙汰だけでも避けたい一心だ。

男の取った部屋はソフトSMの部屋で、大きなテーブルの上にはいくつかの拘束具が並んでいた。

「服、脱いで」

シゲの指にボールペンを絡めた男が、声をひそめる。二人だけの部屋だ。なのに声が低くなるのは、相手が興奮している証拠だろう。

「念のために言わせてもらうけど、俺は情報なんて微塵も持ってないよ」

「知ってる。オレだって、そんなことはどうでもいい」

「じゃあ、何がしたいんだよ。俺は、こういうことされてる暇なんかないんだ。……わかった。やりたんなら、戻ってからでいいだろう」

肩越しに振り向くと、年下だろう男の顔が歪む。地雷を踏んだかと身構えたが、あきれたように息を吐き出しただけだった。

「先に拘束すると、服を破くことになるけど。いいの？」

「よくはない……」

「でしょう。だから、脱いでって言ってんだよ。優しいと思うけどね」

「あのさ、俺、おまえの名前も思い出せなくて、だな……」

「立希だよ。なあ、シゲ！ さっさと脱げ」

指からボールペンが離れ、ここぞと身構えたシゲは直後に、ホールドアップの姿勢を取った。両ひじを胸の高さに上げ、ため息をつく。

さっき、嫌というほど痛みを味わったばかりのスタンガンを見せられ、自分のシャツのボタンに指をかけた。

「童貞じゃないよね」

立希と名乗った男の目がついっと細くなる。

「おまえ、俺より年下だよな」

「三つね」

「こういうの、趣味なのか」

「聞いているのは、俺だろう？ 童貞じゃないよな。いつ、切った？」

「……ストーカーかよ……。十九のときだ。ソープに勤めてた子」

答えながら、シャツを脱いで床に落とす。

「シャワーとか、そういうのは……。あー、はいはい。ないですよ。って言うか、俺としては、きれいにしたいなあって」

「男は経験ないよね」

人の話を聞いているのか、聞いていないのか。ぎりっと睨まれる。その目は不思議と魅力的だった。こんなときに……と自分でも思ったが、欲望と悲壮感がないまぜになった瞳は、思い詰めているようで、どこかぎらぎらしている。

また、ふいに記憶の扉がきしみ、シゲは自分が何かを忘れているのだということだけを受け入れた。それが思い出すべきことなのかどうかまでは考えられないし、わかるはずもない。

「聞かれるまでもねえよ。うっせえ」

言いながらスラックスのベルトをはずして、ファスナーを下ろす。脚を抜いて、靴下も脱いだ。

「あんたは脱がないの？」

下着だけになって向かい合う。立ち尽くした相手の視線が、己の肩に向いていることに気づき、シゲも視線を向ける。

十四の頃だ。犬に思いっきり噛み付かれ、六針縫った。そのときも島原組が入院費から何から払ってくれたのだ。おそらく健康保険になど入っていなかったから、未納分を納めたとしてもかなりの額だっただろう。

「犬にかじられたんだ」

「傷、残ったんだな」

「……痛くはない」

「雨の日も？」

「冬の雨の日は、疼くかな」

シゲの答を聞き、立希がしょんぼりとうつむく。ふっと揺らいだ身体がぶつかりそうになり、シゲは思わず受け止めかける。でも、立希はテーブルの上の拘束具を手にしただけだった。

「その傷がついた理由も、きれいさっぱり忘れてんだろうな」

「.....犬だって。近所の犬がさ、こう.....飛び出してきて」

身体をひねったシゲは、そのまま、首を傾げる。

「そうやって噛まれたんだ。誰か、庇ったみたいな体勢だよな」

「え？」

「そのまんま、後ろに下がって。ベッドまで。抵抗すると、スタンガン使うから。素肌だとさ、痕が残るから、させないでよ」

「させないでって、おまえな.....」

妙なやり取りだ。言われるままに下がり、ベッドに脚が当たる。

「いつも、こんなことしてんの？」

何気なく聞いた言葉に、立希の肩が揺れた。

「男を縛って、犯すのが趣味なのか、ってこと？ なら、NOだけど」

陰鬱な声で言われ、シゲはスタンガンが促してくるとおりにベッドに乗った。

「いや、別に俺だけって言って欲しいわけじゃないから.....そこで暗くなられてもな.....。おまえ、ゲイじゃないだろ。女も抱けそうな顔してるし、モテそうだ」

「褒めてるつもりかよ」

ぶすっとした表情になった立希が、ベッドに膝をつく。

「.....一時間なら相手する」

「ああ？」

「マジで急いでるんだ。組関係じゃないなら、なおさら、明日までとか、勘弁してくれ」

「.....あんた」

シゲのボクサーパンツに手をかけた立希が、がっくりとうなだれる。

「その肩を噛んだ犬も、あんたを犯そうとしてる俺のことも、同じぐらいに思っていない？」

もう一度、深い息を吐いて肩を落とす。

他にどんな思いを抱けばいいのか、シゲにはわからない。

「一時間でさ、終わればいいけどね」

ぐいっとパンツを引っ張られ、自分で脱ぐ。

ここまで来て、もだもだしても時間の無駄だ。やることやって、満足させて、骨折も感電もせずに鹿児島へ行く。そう決めた。

立希は不機嫌に黙り込み、手にした拘束具をベッドに置いた。黒い革のベルトだ。まず手首に巻かれ、チェーンで繋がったもう片方が足首に巻かれる。

「これって、使い回しか.....？」

「さあ、知らねえ。足りないな」

そう言ってベッドを下りた立希は、テーブルの上から、棒付きの拘束具を取って戻り、シゲの太ももに付けてようやく自分の服に手をかけた。

半袖のシャツを脱ぎ、ソファの上に投げる。それからチノパンを脱いだ。ひょろりとしたサラリーマンだと思っていたが、脱いだ身体は引き締まっている。背中肉が薄く、肩甲骨の形がきれいだった。

立希は、チノパンのポケットに差したままになっていた財布を抜き、中から札を取り出すと、出入り口付近にある自販機に吸い込ませる。

いくつも並んだ引き出し形式のひとつを開け、中からボックスを取り出した。

「.....初心者サイズにして欲しいんだけど」

右手首と右足首を、次に反対側も同様に繋がれ、さらに棒枷を太ももにつけられたシゲは、強制的なM字開脚で転がされたまま、バイブを買ったのだと予測した。ラブホテルの構成なら、だいたい想像がつく。SMルームを選んだことはなかったが、そのほかの設備なら同じだろう。

よく見るイボイボ付きじゃなく、先端が膨らんでいるだけのおとなしい外見だが、それを突っ込まれると思うとシゲの気分は自然に暗くなる。痛みを想像して、天井を仰いだ。

「もっとエグいのが来るかと思った」

強がりながら笑うと、苦い感情が胃の中で渦を巻く。骨折か火傷を選んででも逃げるべきだったかと真剣に考え、今さらだと息を吐く。

「そういうこと、言われるのはさあ。今のうちだから」

ベッドを沈ませて近づいてくる立希のくちびるが、膝に押し当てられる。太ももの棒枷を掴まれた。

「ちょっ.....。やめっ.....」

棒を胸に押し付けられると、下半身が無防備になる。男が狙っている場所をいきなり晒すことになる羞

恥に、シゲは顔をしかめて身をよじった。

どうせ男同士だ。裸を見せるぐらい、下半身をいじられるぐらい、なんてことはない。なのに実際は、とても耐えられるものじゃない。

「で、電気……消せよ……」

「何を、処女みたいな……。あー、処女か」

ひたすらなキスで膝を埋め尽くしていた立希が息をつく。熱っぽい吐息に肌を撫でられ、ぞくりとおぞけが走る。

嫌だと思った気持ちの裏側にある、説明のつかない感覚を、シゲは見て見ぬふりした。

胸のざわめきも、粟立つ肌も、嫌悪感の産物だ。そう思う視界が薄暗くなる。

「案外、不安そうな顔するんだな」

元の場所に戻ろうとした立希が動きを止め、顔を覗き込んでくる。シゲは視線を返した。

「やめるなら今だ。こんな火遊び、ヤクザ相手じゃなくてもいいだろ」

「……気持ちよくしてやるよ」

立希はやっぱり人の話を聞いていない。

するっとシゲの頬を撫で、そのまま首筋、そして、鎖骨をなぞる。

「……俺！乳首は、無理だ……笑う、からッ……」

肌を伝って降りる指に乳首をこねられ、シゲは息を呑んだ。くすぐったさに笑いがこみ上げる。

「知ってる」

と立希が言った。

「けど、後ろと一緒にやると、感じまくるからね、あんた」

問いただす間もなく、立希のくちびるが頬に押し当たり、乱暴に転がされる。仰向けからうつ伏せになった。棒枷で開いた両膝を突き、腕の長さ以上に伸ばせない脚のせいで、腰を突き出す姿勢しか取れない。尻穴を晒す屈辱的な格好な上に、身をよじれば腰を振ってみせることになる。

「こんな格好……サイテー……だろ」

呟いたシゲはくちびるを噛んだ。

立希の視線がそこに注がれていることはすぐにわかった。尻を掴まれ、肉を押し広げられる。

顔の置き場がなく、シゲは頭をしきりと動かした。そこへすっと枕が差し込まれたので、額を預ける。視界には開いた自分の脚があり、怯えまくった股間は、我がことながらかわいそうになるほど小さく縮こまっていた。

「……くっ」

腰や脚を撫で回され、尻の肉を丹念に揉まれる。それなりの雰囲気を作りだそうとしているのが、優しくも強引な手つきから伝わっていて、そんなものはいらないとかななしの抵抗を試みたシゲは身をよじった。

噛み殺した吐息が奥歯ですりつぶされ、次に何をされるのかわからない不安に胸が騒いだ。手のひらが内腿を撫で、指先が敏感な場所を辿る。

「……う、ふ……っ」

くすぐったさが微妙な感覚にすり替えられて、さらにいっそう強く奥歯を噛んだ。

「いい肉づきになってんじゃん。昔は痩せてたもんなあ。すぐに割れ目の中が見えちゃって、それはそれでえげつないぐらいエロかったけど……。こうやって、開かなきゃ見えないってのも、エロい」

「やめっ……」

尻の肉を掴まれ、開いたり閉じたりされる。そこに男の視線が集中していると思うと、会話の内容を理解する余裕はなかった。

「なあ、わかってる？嫌がるたびにさ、穴がさあ、ひくひくしちゃってんの……」

ふっと息を吹きかけられ、シゲは驚きで背を反らした。

「う、わっ……。さ、触んなっ……！」

指に襞を撫でられ、腰を引く。立希の目の前で、すぼまりはさらに閉じ、押し当たっている爪先をかすかに締めた。

製品版はこちらでお楽しみください。

Kindle

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01D11CGSI/>

Renta!

<http://renta.papy.co.jp/renta/sc/frm/item/98393/>

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>